

第2回 HIS (Human-oriented Information System) 研究会 開催報告

研究会主査 川野喜一

■開催日時 2016年7月25日(月) 18:30~20:30

■開催場所 青山学院大学 青山キャンパス 総研ビル 10 会議室

■出席者 19名

■開催概要

哲学、倫理学、科学社会学がご専門の村上裕子先生をお迎えして、AI をめぐる哲学的問題についてご講演いただき、AI が登場するこれからの情報システムの課題について考えた。

■講演題目及び講演者

『道徳推論をめぐって』 村上祐子先生 東北大学 大学院文学研究科 国際交流室 准教授

■講演概要

●AI をめぐる倫理

- ・ AI そのものの倫理 (AI が道徳的判断を行うシステム) と研究開発の倫理。今日は前者を議論。
- ・ 道徳的判断の AI への委任の可能性や AI による社会問題解決の可能性。

●道徳的判断 (良し悪しを自動判断させたい) の内実

- ・ 評価・価値観そのものの計算可能な表現への落とし込み (自動化できる部分の既存データの評価)
- ・ 現実問題では何をスコープとするかというフレーム問題が直撃する (評価関数が決まらない)。

●AI をめぐるこれからの課題

- ・ AI の道徳判断の現状: 自動道徳判断システムのレベル (第 1 レベル: 結果が道徳的に判断される、第 2 レベル: 道徳判断がデータとして入っている、第 3 レベル: 自動道徳推論システムを備える、第 4 レベル: 人間と同様の責任能力を問われる)。現況は第 3 レベルにも達していない。
- ・ 自動運転車をめぐる議論は第 4 レベルを想定したものであるが責任能力とは何かの議論が必要。
- ・ AI と人間の関係
 - 人間と機械の区別を棚上げにして、行為主体としての条件を洗いなおすべき。
 - ロボットの心: 機械には意識があるか? といった他我問題は見かけの対立にすぎない。
 - 人間と機械を同じように扱うことになれば、エージェントとしての「合理性」「一貫性」といった他の概念と関係する可能性が大きく、哲学理論そのものの改定を要請することになる。
 - 責任の問題: 法人格付与の可能性は議論すべき。製造物責任や使用者責任といった従来の機械・道具と同等に扱う選択肢は残っている。
 - 共生的自然観: 人間の能力を超えた自然現象に対する東洋、西洋の態度の違い。杜撰なシンギュラリティの議論が独り歩きしないためにも、人間と共生する AI の開発が必須。

■質疑 (ディスカッション)

- ・ 世の中の仕組み自体が情報システム。その内部プロセスにおける AI に関する議論が益々重要になる。
- ・ 法学の立場からは法人格の議論ですら受け入れられない。
- ・ 日本的 (東洋的) 共生モデルにおける人と AI の関係。
- ・ 集団と個の問題 (多様な人間社会で一斉に行動するロボットのコントロールの問題)。
- ・ 行為主体の範囲特定への社会的合意の必要性。

以上